

原子炉実験所だより

目次

巻頭言	1
1. 研究炉の故障と復旧作業の進捗状況について	2
2. 昭和64年度上半期共同利用研究の公募について	2
3. 昭和64年度ワークショップ、専門研究会の公募について	3
4. 第23回学術講演会の開催について	3
5. 将来計画短期研究会の開催について	3
6. 原子炉利用研究者グループ総会の開催について	4
7. 昭和63年度下半期共同利用研究の審査結果	5
8. 昭和63年度下半期臨界集合体実験装置 共同利用研究の審査結果	9
9. 昭和63年度ワークショップ、専門研究会の審査結果	10
10. 実験装置・設備ニュース —— ガンマ線照射装置の利用について ——	12
11. 米国の研究機関と学術上の協力と交流の覚書調印	12
12. 研究成果データベースの更新に関するお願い	13
13. 外国人研究者の受入れについて	14
14. 外国人研究者講演会報告	15
15. 審議員名簿	16
16. 運営委員名簿	17
17. 臨界集合体実験装置共同利用委員名簿	18
18. 昭和63年度非常勤講師について	18
19. 職員の異動	19
20. 委員会メモ（昭和63年4月～9月）	21
編集後記	22

巻 頭 言

所 長 岡 本 朴

大学における基礎研究は本来真理の探究を目指すべきものである。真理とは究極において概念と現実の一致を求めることに他ならないが、古来人類は現実を認識するにあたってさまざまな波動の働きに頼って来た。古くは可聴音・可視光であり、やがてはX線・赤外線・超短波・超音波、そしてガンマ線や電子線を用いることによってつぎつぎに新しい現実を捉えて来た。これ等の波動は対象の大きさや密度・配列やエネルギー状態によって選択され、ある時は光学的影像を、ある時は回折像を描き、またある時はその波長そのものによって対象のエネルギー状態の変化を現してきた。“自然の光だけによって絶対不動の真理には到達し得ない。神の啓示からもたらされる超自然の光によってのみ至高の真理にいたることが出来る。”(Tomaso d' Aquino)という考え方もあるけれど、自然科学にあつては自然の光から得られる認識が価値を持つものでなければならない。それ故、新しい認識のためには新しい波動や波動のもたらす情報の新しい捉え方が不可欠である。

物質の内部構造に関する知見を得るためには、これまでX線が重要な役割を担ってきた。しかし、X線によっては原子や分子の配列や分布状態に関する知見を得ることは出来ても、それ等相互の結合力等についての直接の情報を得ることは出来なかった。熱中性子は、物質の熱エネルギーと同程度のエネルギー状態にあり、また水素原子核と同じ質量を持っているので、物質を構成している原子や分子の集団との間で運動量とエネルギーを同時に交換する。したがって、散乱の過程で中性子の交換したエネルギーと運動量を測定して、物質中の原子や分子の集団運動の状態を知ることが可能となった。このように熱中性子という本格的な物質波を手にした人類は、実験の手段として中性子散乱や、理論として第2量子化の手法などを用いて、物質の内部構造における堅さや柔らかさ、あるいは塑性や粘性に関する知見を手にするようになった。

このことは最も身近な現実と概念の一致をもたらすものとして真理探究に大きな一歩を踏み出したものであり、画期的なことといえる。しかも、この新しい光によって人類が今後手にするであろう知見は、これまでの光から得た全ての知見に匹敵するといっても過言ではない。ただ残念なことに我国においてはこのことは未だ十分に認識されていない。我国の公務員が多忙でありまた行政と政治の狭間にあって苦闘されていることは周知のことであるけれども、このような浮世離れした命題にも多少の時間を恵与賜ることが切望されるところである。

1. 研究炉の故障と復旧作業の進捗状況について

研究炉部

本年、研究炉が長期間停止する発端となった二基の熱交換器の故障については、これらを更新することとなり、その作製にとりかかり、本年度内に完成することになっています。また、この夏から問題となったトリチウムの漏洩については、その後漸次調査が進み、次の段階に移っています。

これまでの調査は、放射線防護上、主として間接的な方法で行い、重水水位とトリチウム濃度の変化の相関関係、カバーガスとして使用しているヘリウムを用いた漏洩試験等を行い、総合的判断材料としました。また、カバーガス、重水、タンク付着物、黒鉛中に含浸している水分などの分析も行いました。

これらの結果から、重水温度測定用の熱電対を挿入するためにタンク上部に取り付けてある熱電対挿入用さや管に漏洩孔があるものと考えています。なお、調査の途中で重水タンク前面中央部にあるビスマスプラグ及び黒鉛ストリンガーを抜いて、重水タンクの一部を直接観察することも行いました。その際、タンクに重水を入れた状態で、当初タンク表面を水滴が滴下する現象が一時的にみられましたが、周辺の除湿を進めると共に観察されなくなり、タンク表面で水分が検出されなくなりました。このことは、既に漏洩して黒鉛層に浸み込んでいた重水が、徐々に乾燥していることを意味しています。

漏洩部の修理には、放射線量率の点からも、また、二次故障発生防止対策の上からも、立案・準備に万全を期する必要があります。そのため、また、重水系統の全面的な点検のために、一時重水を軽水に置き換えて作業を行う方針を立て、この線に沿って監督官庁等とも打ち合わせながら準備を進めています。

2. 昭和64年度上半期共同利用研究の公募について

昭和64年度上半期（昭和64年4月～9月）の共同利用研究の公募は、申請の締切りを昭和63年12月10日(土)として、既に関係機関あて通知いたしました。なお、研究炉を利用する共同研究につきましては、研究炉重水設備の修復になお日時を要するため、運転再開の目途がついた時点で改めて公募を行うこととしておりますので、ご了承願います。

3. 昭和64年度ワークショップ、 専門研究会の公募について

昭和64年度のワークショップ、専門研究会の公募につきましては、来年1月下旬頃各関係機関に公募通知が送付される見込みですので、ご留意下さい。

4. 第23回学術講演会の開催について

第23回目の京都大学原子炉実験所学術講演会が下記の要領で計画されています。できるだけ多くの方々のご参加をお願いします。

記

学術講演会開催日 : 1989年1月26日(木)

9:30~17:00(予定)

開催場所 : 京都大学原子炉実験所 事務棟会議室

講演会内容 : 原子炉実験所内外の研究者が実験所の施設、設備を利用して、今までに行った研究の成果の公开发表(ポスターセッションを含む)及び学術公開委員会より依頼する特別招待講演

5. 将来計画短期研究会の開催について

当実験所の将来計画に関する研究会が、下記の要領により開催される予定ですので、ご参加くださるようご案内いたします。

記

日時 : 昭和64年1月27日(金)午前9時30分~12時

場所 : 京都大学原子炉実験所 事務棟会議室

趣旨 : 実験所の将来計画に関する討論

参加資格 : 特に制限なし。

申込方法等 : 1) はがき、または電話により申込むこと。

2) 申込先 〒590-04 大阪府泉南郡熊取町野田

京都大学原子炉実験所 共同利用掛

☎ 0724-52-0901(内)2151~2

3) 申込期限 昭和64年1月21日(土)必着のこと。

4) 記載事項 (次のとおり)

将来計画短期研究会参加申込書

1. 氏名
2. 所属・職名・級号俸
3. ご希望又はご意見の要旨 (なるべく詳しく)
4. 宿泊および食事の希望 (あれば○、なければ×)

	1月26日(木)	1月27日(金)
昼 食		
夕 食		
宿 泊		

5. その他

6. 原子炉利用研究者グループ総会の開催について

下記のとおり原子炉利用研究者グループ総会を開催いたしますので、ご参集下さるようお願いいたします。

記

日 時 : 昭和64年 1月27日(金)12時30分～13時30分

場 所 : 京都大学原子炉実験所 事務棟会議室

議 題 : (1) 昭和63年度事業報告

(2) 昭和63年度会計経過報告

(3) 昭和64年度の活動方針について

(4) 昭和64年度の予算について

(5) その他

なお、昼食準備の都合上、ご出席の方は将来計画短期研究会への参加申込時に、昼食の要否をお知らせ下さい。

会員各位からの要望については、あらかじめ事務局あて文書でお知らせ下されば、前日開催予定の幹事会で検討し、実現の見込みのあるものについては総会に諮りたいと思います。

もちろん、総会の席上でご提案下さっても結構です。

7. 昭和63年度下半期共同利用研究の審査結果

研究炉を2MW以下で運転する予定で、昭和63年度下半期共同利用研究を公募しましたが、研究炉重水設備のトラブルにより、研究炉を利用する共同研究を実施していただけなくなり、ご迷惑をおかけいたしました。

このため、申請件数44件のうち、採択は以下の16件となりました。

昭和63年度下半期共同利用研究採択一覧

申請者・協力者			研究題目	採択区分	出張			
氏名	所属・職名				人員	一人 当り 出張 回数	一人 一回 滞在 日数	一人 当り 延べ 日数
栗山 一男 佐藤 政孝 河原 博之 川久保鐵哉	法政大・工 教授 " 院生 " " 京大・原子炉 助教授		中性子転換注入化合物 半導体の電気的性質	共同	1 院2	1 1	4 4	4 4
蔵元 英一 佃 昇 安部 博信 青野 泰久 竹中 稔 横井 浩一 入沢 大逸 渡辺 英雄 福井 博之 田中 郁昭 吉田 博行	九大・応力研 教授 " 助教授 " 助手 " " " 技官 "・総合理工 院生 " " " " " " " " 京大・原子炉 助教授		鉄合金およびセラミッ クスの低温照射効果	共同	1 4 院2	1 1 1	2 4 4	2 4 4
岡田 東一 片桐 一宗 西嶋 茂宏 西浦 徹也 山下 哲也 奥山 浩 大上 真志 吉田 博行 山岡 仁史	阪大・産研 教授 " 助手 " " " 教務員 "・工 院生 " " " " 京大・原子炉 助教授 " 教授		超電導マグネット材料 の核融合環境試験	共同	2 院2	2 2	4 4	8 8
三宅 寛 小田 啓二 伊藤 正己 木村 逸郎 小林 捷平 占部 逸正	神戸商船大 教授 " 助教授 " 院生 京大・工 教授 京大・原子炉 助手 " "		コンバータ付C R - 39による熱外及び中 速中性子の測定	共同	2 院1	2 2	5 5	10 10

申請者・協力者				採択 区分	出張			
氏名	所属・職名		研究題目		人員	一人 当り 出張 回数	一人 一回 滞在 日数	一人 当り 延べ 日数
木村 逸郎 金沢 哲 藤田 薫 小林 捷平 山本 修二	京大・工 " 京大・原子炉 " "	教授 技官 教授 助手 技官	共鳴領域の中性子断面 積の精密測定	共同	1 1 1	1 2 2	1 2 6	1 4 12
檀原 宏 小林 捷平 中野 幸廣	信州大・農 京大・原子炉 "	教授 助手 技官	γ, n 反応による ^{76}As の製造に関する研究	共同	1	2	3	6
小野 公二 芥田 敬三 阿部 光幸 上野 陽里 赤星 光彦 古林 徹	京大・医附属病院 "・医 " 京大・原子炉 " "	助手 " 教授 " 助教授 技官	マウス肝細胞(in vivo) の熱中性子感受性に関 する研究(予備実験)	共同	2	1	1	1
豊田 和弘 斎藤 潤 倉中 聡 永井 隆哉 田中 雅彦	東大・理 " " " "	助手 院生 " " "	カーボナタイトおよび その風化土壌の地球化 学的研究	一般	1 院1	1 1	1 1	1 1
山本 洋 河出 清 柴田 理尋 宮地 正英 長 明彦 加藤 敏郎 阮 建治 岡野 事行 川瀬 洋一	名大・工 " " " " " 立教大・理 京大・原子炉 "	助手 助教授 院生 " " 教授 " " 助教授	KUR-ISOLによ る核分裂片の研究	共同	2 院2	1 1	5 5	5 5
加賀 精一 田村 年広 有満 佳生 武田 静彦 松井 孝夫 日比野 隆 日指 史雄 松谷 秀夫	大阪工大 " " " " " " "	教授 院生 学生 " " " " "	各種異材継手の低温強 度に及ぼす中性子照射 の影響	一般	1 院1 院1	1 1 3	2 2 1	2 2 3
藤田 英一 那須 三郎 谷本 久典 富士沢 敦 前田 豊 川瀬 洋一	阪大・基礎工 " " " 京大・原子炉 "	教授 助手 院生 " 教授 助教授	Mossbauer効果による 金属・合金の照射損傷 の研究	共同	1 1 院2	1 2 2	1 4 4	1 8 8

申請者・協力者		研究題目	採択区分	出張			
氏名	所属・職名			人員	一人 当り 出張 回数	一人 一回 滞在 日数	一人 当り 延べ 日数
上原 進一 吉田 博行	京大・原子炉 教務員 " 助教授						
中川 義信 桐野 有成 赤池 祐司 畠中 担 松本 圭蔵 古林 徹 上野 陽里	国立療養所 医長 香川小児病院 " " " 医員 帝京大・医 教授 徳島大・医 " " 京大・原子炉 技官 " 教授	硼素中性子捕捉療法の 基礎的研究	共同	2	1	1	1
吉城 肇 田中 昌 山口 晃 森田 欣之 宇津呂雄彦 河合 武	高エネ研 教授 東北大・理 " " " 助教授 " 教務員 京大・原子炉 教授 " 助手	超冷中性子発生のため の冷中性子源特性試験	共同	1 3	2 2	10 4	20 8
阿部 史朗 藤元 憲三 笠井 篤 天野 光 柳瀬 信之 小林 恒夫 望月 定 児島 紘 三浦 和彦 川本 洋人 下 道国 飯田 孝夫 松本 譲 岩田 徹 米原 英典 西川 嗣雄 稲継 成文 堺 千展 床次 真司 藤波 直人 吉岡 勝広 山本 政儀 池田 耕一 三宅 寛 辻本 忠 山崎 敬三 義本 孝明	放医研 室長 " 研究員 原研 室長 " 研究員 " " 福島県立医大 講師 室蘭工大 助教授 東京理大・理工 " " " 理 助手 " 基礎工 " " 名大・工 助手 " " 九大・工 助手 " 院生 滋賀医大 助手 福井大・工 " " " 学生 早大・理工研 院生 " " 京都府衛公研 技師 島根県衛公研 研究員 金沢大・理 助手 国立公衆衛生院 主任研究員 神戸商船大 教授 京大・原子炉 助教授 " 助手 " 技官	室内空気中のラドンと その娘核種の動態	共同	7 院 2	1 1	6 6	6 6

申請者・協力者				研究題目	採択 区分	出張			
氏名	所属・職名		人員			一人 当り 出張 回数	一人 一回 滞在 日数	一人 当り 延べ 日数	
中川 益夫	香川大・教育	教授	絶縁体結晶の格子欠陥 生成における照射温度 効果	共同	1	2	3	6	
伊藤 寛	"	助教授			2	1	3	3	
中西 俊介	"	"							
岡田 守民	京大・原子炉	助手							
跡部 紘三	鳴門教育大	助教授							
山川 浩二	広大・工	助教授	銅基合金の中性子照射 損傷	共同	4	2	6	12	
下村 義治	"	教授			院 1	2	6	12	
福島 博	"	助手							
向田 一郎	"	"							
小島 淳司	"	院生							
吉田 博行	京大・原子炉	助教授							

(昭和63年9月22日、10月14日運営委員会)

8. 昭和63年度下半期臨界集合体実験装置

共同利用研究の審査結果

臨界集合体実験装置共同利用委員会において審査の結果、採択は以下の4件となりました。

臨界集合体実験装置共同利用採択一覧

申請者・協力者		実験課題	採択区分	出張人数
氏名	所属・職名			
木村 逸郎	京大・工・教授	トリウム転換ハイブリッド炉 の基礎研究	通常	1人×6日
金沢 哲	技官			1人×12日
巻上 毅司	院生			
市原 千博	京大・原子炉・助手			
林 脩平	" "			
小林 圭二	" "			
中村 博	技官			
茶谷 浩	" "			
竹田 敏一	阪大・工・助教授	KUCA炉物理特性解析	通常	3人×2日
久語 輝彦	院生			8人×2日
山口 嘉温	" "			
青木 繁明	" "			
仙石 勝久	" "			
宇根崎 博信	" "			
仁科 浩二郎	名大・工・教授			
中野 佳洋	院生			
松村 和彦	" "			
小林 啓祐	京大・工・助教授			
日山 伸行	院生			
三沢 毅	" "			
山本 章夫	" "			
藤原 秀介	" "			
巻上 毅司	" "			

申請者・協力者		実 験 課 題	採択区分	出張人数
氏 名	所 属 ・ 職 名			
神田 啓治	京大・原子炉・助教授			
林 正俊	” 助 手			
代谷 誠治	” ”			
大澤 孝明	近大・原研・助教授	臨界炉心中における箔反応率 の測定	通 常	1人×6日
小林 圭二	京大・原子炉・助 手			
代谷 誠治	” ”			
工藤 和彦	九大・工・教 授	臨界炉心中での箔反応率の測 定	通 常	1人×6日 5人×6日
福原 斎博	” 院 生			
井上 政春	” ”			
江藤 和敏	” ”			
岡本 拓男	” ”			
二村 英介	” ”			
小林 圭二	京大・原子炉・助 手			
代谷 誠治	” ”			

(昭和63年8月26日臨界集合体実験装置共同利用委員会)

9. 昭和63年度ワークショップ、 専門研究会の審査結果

運営委員会において審査の結果、採択は以下のワークショップ3件、専門研究会16件となりました。

昭和63年度ワークショップ採択一覧

ワークショップ名	申 請 者	開 催 責 任 者	
		所 外	所 内
冷中性子及び超冷中性子に関する開発と応用	秋吉 恒和	広大・総合 教授 好村 滋洋	宇津呂雄彦
新型研究炉案の技術的評価	藤田 薫顕	京大・工 教授 東 邦夫	藤田 薫顕
技術研究会	岡本 朴	東北大・工 教授 梶山 一典	岡本 朴

(昭和63年4月8日運営委員会)

昭和63年度専門研究会採択一覧

研 究 会 名	申 請 者	開 催 責 任 者	
		所 外	所 内
中性子・X線回折による水素結合結晶の相転移機構	北大・理 教授 徳永 正晴	北大・理 教授 徳永 正晴	澁谷 巖
¹⁰ B生体関連化合物と中性子捕捉療法	東北大・理 教授 山本 嘉則	東北大・理 助手 根本 尚夫	北岡 祥伯 上野 陽里
放射線を利用した生命現象解明への展望	生島 隆治	東大・理 助手 三谷 啓志	生島 隆治
低温照射効果	名大・工 教授 桐谷 道雄	名大・工 教授 桐谷 道雄	吉田 博行
非平衡・不均一相の放射線化学	山岡 仁史	東工大・理 教授 笹野 嘉彦	山岡 仁史
原子炉による核化学・核物理	岡野 事行	広大・理 教授 吉沢 康和	岡野 事行 川瀬 洋一
放射性廃棄物管理	京大・工 教授 東 邦夫	京大・工 教授 東 邦夫	下浦 一邦
樹木年輪情報の利用法に関する研究	広大・総合 教授 福岡 義隆	広大・総合 教授 福岡 義隆	東村 武信
核分裂と核破砕の物理と工学	木村 逸郎	京大・工 教授 木村 逸郎	中込 良廣
臨界安全	小林 圭二	名大・工 教授 仁科浩二郎	小林 圭二
研究用原子炉による半導体研究	阪大・基礎工 教授 西田 良男	阪大・基礎工 教授 西田 良男	川久保鐵哉
原子炉による中性子放射化分析の基礎及び応用	小山 睦夫	名大・理 助教授 古川 路明	小山 睦夫 武内 孝之
保健物理研究センター計画	石田 政弘	京大・放生研 教授 岡田 重文	石田 政弘
高性能原子炉の除熱	西原 英晃	阪大・工 助教授 宮崎 慶次	西原 英晃
燃料信頼性評価研究	九大・工 教授 古屋 廣高	九大・工 教授 古屋 廣高	玉井 忠治
高転換・高燃焼原子炉	神田 啓治	阪大・工 教授 関谷 全	神田 啓治 代谷 誠治

(昭和63年4月8日、9月22日運営委員会)

10. 実験装置・設備ニュース

— ガンマ線照射装置の利用について —

現在、線源補充およびオーバーホールのため、照射装置は使えない状態になっており、各分野の研究者の方々に大変ご不便をおかけしております。今後の作業予定と利用再開時期についてお知らせします。

- (1) 12月初旬～中旬：線源収納新容器の搬入・据え付け作業および駆動部ランニングテスト
- (2) 12月中旬～下旬：増強線源搬入・格納作業およびインターロック、電気系統の整備
- (3) 1月初旬～中旬：総合チェックとトータルランニングテスト

となっており、順調にいけば来年1月下旬には利用が可能になります。

利用再開時の性能として、放射能は 4.15×10^{14} Bq、最大線量率は 38.0 k Gy/h に復帰します。なお、今回のオーバーホールを機に、新型操作盤の導入と、管理準備室の増築をすることになっておりますので、完成後は今までより利用し易くなると思います。

1月下旬以後の利用のご希望がありましたら、できるだけ便宜を図りたいと考えておりますので、ご相談下さい。

連絡先：0724-52-0901 内線2408（長谷）、2409（野田）、2151（共同利用掛）

11. 米国の研究機関と学術上の協力と交流の覚書調印

原子炉実験所では、海外の研究機関との研究協力、共同利用、人物交流、研究会の共催などを促進するため、このたび米国の二研究機関と学術上の協力と交流に関する覚書の調印を行いました。

相手機関は、ミンガン大学フェニックス原子炉実験所（所長W.カー教授、昭和62年11月24日付け調印）とマサチューセッツ工科大学原子炉実験所（所長O. K. ハーリング教授、昭和63年4月27日付け調印）です。

覚書内容は以下のとおりです。

研究用原子炉の技術開発、研究用原子炉を用いた研究の推進及びこれらに関連した技術開発のため、特に次の諸活動を促進するものとする。ただし、いずれも平和利用の目的に限る。

- (1) 学術出版物の交換
- (2) 研究者、技術者、大学院生の交流
- (3) 共同研究集会の開催
- (4) 共同研究
- (5) 施設相互利用研究

12. 研究成果データベースの更新に関するお願い

要覧委員会委員長 東村 武信

先年来、研究成果データベースの作成にあたり、皆様にはご多忙中にもかかわらず多大のご協力を賜わり、深く感謝申し上げます。お陰様で、現在までに当実験所が設置されました1963年から1985年までの23年間に出版されました文献約4,000編に関するデータを、京都大学大型計算機に入力することができました。このデータベースの検索方法については資料(1)を、検索結果については資料(2)を、そして今までに収録されている文献の中から、主として原著論文とプロシーディングを投稿誌別にリストアップしました資料(3)を発行しました。これらを必要とされる方は、図書掛までご請求のうえご参照下さい。

一方、1986年以降に出版されました文献についてもデータを追加していく必要がありますので、1987年12月までに皆様が公表されました文献に関して当実験所所定の研究成果調査票にご記入下さり、別刷（又はそのコピー）1部を添付のうえ、1989年1月末日までにご送付下さいますようお願い申し上げます。また、1985年以前に出版されました文献につきましても研究成果調査票の未提出がありましたら、同様にお送り頂ければ幸いです。重ねて、ご協力賜わりますようお願い致します。

なお、研究成果調査票を必要とされる方は、お手数ですが、下記までご請求下さい。

参照資料

- 1) 京都大学大型計算機センター広報 Vol.18、No 1、
pp.28～36（1985年2月）
- 2) 京都大学原子炉実験所第21回学術講演会講演要旨集
pp.115～120（1987年3月19日）
- 3) 京都大学原子炉実験所研究成果一覧（1963年～1985年）
（1988年2月）

請求及び送付先：

〒590-04 大阪府泉南郡熊取町野田

京都大学原子炉実験所

要覧委員会（武内孝之）宛

13. 外国人研究者の受入れについて

氏 名 (所 属)	国 籍	研 究 題 目	受入期間	備 考
張 金忠 (北京大学 生物系大学院)	中 国	光合成器官の形態形成及び機能 発現に関する研究	昭和 61.10.1 ～ 63.9.30	研修員
Wilhelm Ehrlich (ベルリン自由大学)	西ドイツ	哺乳動物細胞の代謝に及ぼす環 境要因の作用に関する研究	62.12.3 ～ 63.10.2	外国人共同 研究者
Thomas H. L. Karlewski (マインツ大学) 核化学研究所	西ドイツ	中性子過剰希土類核種の核分光 学的研究	63.3.2 ～ 64.3.1	外国人共同 研究者
金 光川 (吉林市 輻射化学研究所)	中 国	放射線作用の研究	63.3.25 ～ 64.3.24	招へい外国 人学者
Deliana Wadito (インドネシア) 原子力庁	インドネシア	1.機器、実験、データ処理のた めの計算機の利用 2.元素及び同位体の機器的分析 法	63.4.1 ～ 64.3.31	研修員
Laksmi Moerdoko (インドネシア) 原子力庁	インドネシア	^{235}U の核分裂生成物からの ^{99}Mo 、 アクチニド及びランタノイド同 位体の分離	63.4.1 ～ 64.3.31	研修員
S. M. Lee (国立インデラガンジー) 原子力研究センター	イ ン ド	新型原子炉の核特性に関する研 究	63.5.1 ～ 63.11.30	招へい外国 人学者
Sharshar Taher M. A. (タンク大学教育学部)	エジプト	中性子放射化分析法の開発とそ の応用	63.10.1 ～ 65.3.31	研究生
John M. Webb (マードック大学) 数学物理学部	オーストラリア	生体におけるミネラル化の研究	63.10.9 ～ 63.11.13	外国人共同 研究者

14. 外国人研究者講演会報告

昭和63年3月以降に原子炉利用研究者グループの後援により、下記のような講演会が行われました。

① 昭和63年3月7日開催

“Test and Research Reactors in China”

Dr. Li Yulun

(Division of Reactor Engineering and Technology, Institute of Atomic Energy,
Beijin, China)

② 昭和63年4月14日開催

“Primary Reactions in Irradiated Aqueous Solutions : Pulse Radiolysis Study”

Dr. G. V. Buxton

(University of Leeds, UK)

③ 昭和63年4月14日開催

“Geological Fault Detection using Radon Emanation as an Indication”

Prof Dr. Pao-Shan Weng

(Institute of Nuclear Science, National Tsing Hua University, Taipei)

④ 昭和63年4月27日開催

“Present Status on Research Activity in the Nuclear Reactor Laboratory of MIT”

Prof. Dr. Otto K. Harling

(The Nuclear Reactor Laboratory, Massachusetts Institute of Technology, USA)

⑤ 昭和63年5月27日開催

“Nuclear Structure Studies of Neutron-Rich Nuclides Using a Cf-252 Based ISOL
Facility”

Dr. R. C. Greenwood

(Nuclear Physics Division of EG&G Idaho, Inc., USA)

15. 審 議 員 名 簿

昭和63年7月1日現在

北海道大学	教 授	(工 学 部)	諸 住 高
東北大学	教 授	(同)	楯 山 一 典
東京工業大学	教 授	(原子炉工学研究所)	岡 本 眞 實
大阪大学	教 授	(工 学 部)	関 谷 全
同	同	(産 業 科 学 研 究 所)	高 椋 節 夫
同	同	(理 学 部)	小 川 英 行
同	同	(医 学 部)	小 塚 隆 弘
九州大学	教 授	(工 学 部)	古 屋 廣 高
京都大学	教 授	(理 学 部)	小 林 晨 作
同	同	(医 学 部)	阿 部 光 幸
同	同	(農 学 部)	駒 野 徹
同	同	(原子エネルギー研究所)	櫻 井 彰
同	同	(原 子 炉 実 験 所)	岡 本 朴
同	同	(同)	筒 井 天 尊
同	同	(同)	岩 田 志 郎
同	同	(同)	東 村 武 信
同	同	(同)	澁 谷 巖
同	同	(同)	石 田 政 弘
同	同	(同)	西 原 英 晃
同	同	(同)	藤 田 薫 顕
同	同	(同)	小 山 睦 夫
同	同	(同)	岡 野 事 行
同	同	(同)	山 岡 仁 史
同	同	(同)	上 野 陽 里
同	同	(同)	宇 津 呂 雄 彦
同	同	(同)	前 田 豊

16. 運 営 委 員 名 簿

昭和63年10月1日現在

静岡大学	助教授	(農学部)	中井弘和
名古屋大学	同	(工学部)	河出清
大阪大学	教授	(基礎工学部)	西田良男
同	助教授	(工学部)	竹田敏一
広島大学	同	(総合科学部)	佐藤博明
香川大学	教授	(教育学部)	中川益夫
九州大学	同	(工学部)	古屋廣高
大阪市立大学	同	(生活科学部)	片山洋子
立教大学	同	(理学部)	阮建治
青山学院大学	同	(理工学部)	木村幹
京都大学	同	(工学部)	木村逸郎
同	同	(放射線生物研究センター)	佐々木正夫
同	事務局長		菴谷利夫
同	教授	(原子炉実験所)	澁谷巖
同	同	(同)	西原英晃
同	同	(同)	小山睦夫
同	同	(同)	山岡仁史
同	同	(同)	宇津呂雄彦
同	同	(同)	前田豊
同	助教授	(同)	吉田博行
同	同	(同)	玉井忠治
同	同	(同)	下浦一邦
同	同	(同)	辻本忠
同	同	(同)	川瀬洋一
同	同	(同)	長谷博友

17. 臨界集合体実験装置共同利用委員名簿

昭和63年10月1日現在

北海道大学	助教授	(工 学 部)	成 田 正 邦
東北大学	教 授	(同)	平 川 直 弘
東京工業大学	助教授	(原子炉工学研究所)	服 部 俊 幸
名古屋大学	講 師	(工 学 部)	山 根 義 宏
大阪大学	助教授	(同)	竹 田 敏 一
東海大学	同	(同)	阪 元 重 康
京都大学	同	(同)	小 林 啓 祐
同	教 授	(原子炉実験所)	西 原 英 晃
同	同	(同)	小 山 睦 夫
同	同	(同)	山 岡 仁 史
同	助教授	(同)	神 田 啓 治
同	同	(同)	川久保 鐵 哉
同	同	(同)	川 瀬 洋 一
同	講 師	(同)	秋 吉 恒 和

18. 昭和63年度非常勤講師について

昭和63年度非常勤講師として、次のとおり委嘱しました。任期は昭和63年10月16日から昭和64年3月31日までです。

所 属	職 名	氏 名	題 目	受 入 部 門
九州大学 理学部	助教授	阿知波紀郎	高温超伝導体の構造相転移の研究	原子炉設備関係部門
法政大学 第一教養部	教 授	中島 龍三	原子核理論(原子炉崩壊熱)	計測装置関係部門
秋田大学 医学部	教 授	滝澤 行雄	環境放射能の生体への影響	放射線管理関係部門
京都大学 医学部	助教授	高橋 正治	放射線の制がん効果を高める方法に関する研究	附属原子炉医療基礎 研究施設

19. 職 員 の 異 動

1. 昇 任

昭和63年 3 月16日付	原子炉関係部門 (原子炉関係部門助手から)	助教授 三 島 嘉一郎
昭和63年 3 月16日付	計測装置関係部門 (計測装置関係部門助手から)	助教授 長 谷 博 友
昭和63年 3 月16日付	廃棄物処理設備関係部門 (廃棄物処理設備関係部門助手から)	助教授 清 水 良 明
昭和63年 4 月 1 日付	総務課長 (庶務部庶務課課長補佐から)	事務官 東 邦 夫
昭和63年 4 月 8 日付	総務課共同利用掛長 (庶務部庶務課学務掛学務主任から)	事務官 山 口 慎 一
昭和63年 6 月16日付	ホットラボ設備関係部門 (ホットラボ設備関係部門助手から)	助教授 赤 星 光 彦
昭和63年 7 月 1 日付	原子炉関係部門 (原子炉関係部門助教授から)	教 授 宇津呂 雄 彦
昭和63年 7 月 1 日付	計測装置関係部門 (計測装置関係部門助教授から)	教 授 前 田 豊
昭和63年 8 月 1 日付	原子炉関係部門 (原子炉関係部門助手から)	講 師 跡 部 紘 三

2. 配 置 換

昭和63年 3 月16日付	放射線管理関係部門 (結核胸部疾患研究所附属病院助手から)	助 手 山 本 孝 吉
昭和63年 4 月 1 日付	総務課庶務掛 (医学部附属病院医事課入院掛から)	事務官 細 江 久 光

昭和63年4月1日付 原子炉関係部門 教授 木村逸郎
(工学部原子核工学教室へ)

昭和63年4月1日付 総務課長 事務官 文字健二
(基礎物理学研究所事務長へ)

昭和63年4月1日付 総務課庶務掛 事務官 吉田良博
(保健診療所庶務掛へ)

昭和63年4月1日付 経理課経理掛 事務官 明田浩
(施設部企画課会計掛へ)

昭和63年4月8日付 総務課共同利用掛長 事務官 森本初
(経済学部庶務掛長へ)

昭和63年10月1日付 原子炉関係部門 講師 跡部紘三
(鳴門教育大学学校教育学部助教授へ)

3. 採用

昭和63年4月1日付 経理課経理掛 事務官 大井俊二
(採用)

4. 退職

昭和63年3月30日付 中央管理室 事務補佐員 吉田雅子
(退職)

昭和63年3月31日付 経理課工営掛 技官 山下長生
(定年退職)

20. 委員会メモ（昭和63年4月～9月）

- 4月8日 第130回運営委員会
15日 審議会・協議員会
18日 運営委員会（回議）
22日 昭和63年度第1回原子炉安全委員会
- 5月11日 臨時原子炉安全委員会
13日 昭和63年度第2回原子炉安全委員会
13日 第61回臨界集合体実験装置共同利用委員会
20日 審議会・協議員会
- 6月3日 協議員会
7日 運営委員会（回議）
10日 昭和63年度第3回原子炉安全委員会
17日 審議会・協議員会
24日 昭和63年度第1回保健物理委員会
- 7月8日 第131回運営委員会
15日 審議会・協議員会
22日 昭和63年度第4回原子炉安全委員会
- 8月16日 審議会・協議員会（回議）
19日 昭和63年度第5回原子炉安全委員会
26日 第62回臨界集合体実験装置共同利用委員会
- 9月1日 臨時原子炉安全委員会
13日 原子炉安全委員会（回議）
16日 臨時原子炉安全委員会
16日 審議会・協議員会
21日 昭和63年度第6回原子炉安全委員会
22日 臨時運営委員会
30日 昭和63年度第2回保健物理委員会

編 集 後 記

「原子炉実験所だより」No.1をお届け致します。「KUR NEWS」No.104が発行されたあと、種々の理由により従来のような「KUR NEWS」を発行することが困難になってきました。

このたび、研究活動に関する情報の流れを促進するため、公的な機関紙「原子炉実験所だより」を発行することが実験所審議会・協議員会において認められ、発刊の運びとなりました。機関広報誌となると、その性格など種々議論のあるところですが、共同利用に関する情報の流れを止めないことを重視し、とりあえずは従来の「KUR NEWS」の公的な部分を引継ぐかたちでスタートしました。原子炉実験所の現状と将来を考えると、本誌の果たす役割は極めて重要であると思われます。「原子炉実験所だより」委員会が編集の任にあたりますが、ご指導のほどお願いします。当面、次のものが委員を務めます。

橋本哲夫（新潟大・理）	〔運営委員会推薦〕
木村逸郎（京 大・工）	〔 同 上 〕
西村 進（京 大・理）	〔 同 上 〕
玉井忠治	〔 同 上 〕
前田 豊	〔 同 上 〕
岩田 豊	〔運営委員会推薦、出版委員会委員長〕
東村武信	〔要覧委員会委員長〕
東 邦夫	〔総務課長〕
高橋 齊	〔経理課長〕
山口慎一	〔総務課共同利用掛長〕